



中村俊定文庫  
文庫 18  
567







序



此書物居上回光忌を撰ぐに徳和の二十年の  
 月原と草紙の絶つとを述す摩訶のつとを無と  
 はり給いしに後馬の鳴く大無五上を成の  
 方あり居上まらふ伊勢を讀了書林下り  
 賜も亦甘て其月也いと得たり思ふ世り  
 身より幾度より一言今に一樹にふ言む  
 之に九念香のまらりくくくくくくくくくくく

天

ら



君らげのせんそふ夏の山のかき流るる泉の  
余情よ川の境まじく流れてよりのしむるを  
たのしむるあはれなる時をなむわかれのまじり  
あまんの思はずあまのしるすのしるすを  
便に山川のまじりあまのしるすのしるすを  
昔のしるすのしるすのしるすのしるすを  
瞬に夏のあまのしるすのしるすのしるすを  
あまのしるすのしるすのしるすのしるすを  
しるすのしるすのしるすのしるすのしるすを

幸ふじきあまのしるすのしるすのしるすを  
二町の遠るる逢ふるのしるすのしるすを  
進歩のしるすのしるすのしるすのしるすを  
代々糸のしるすのしるすのしるすのしるすを  
錦衣のしるすのしるすのしるすのしるすを  
あまのしるすのしるすのしるすのしるすを  
侯名のしるすのしるすのしるすのしるすを  
古くも御階のしるすのしるすのしるすを  
層表のしるすのしるすのしるすのしるすを



神々言人くく耳ふのりー白ニ  
編と進言其の書も集めたり其の事  
是れ日川一波の志と述べる事なり

安永九年子年福冬 少菴社誌



芭蕉翁書

麥林舎し由

守黒庵柳居

竹久阿氏性皆長水とて享保の末五色を著し其の書者  
所謂 素丸 宗瑞 蓮之 照尺とる人也 古州の風流を及して  
武江に蕉風の衰えたるを記すむと約す 蓋をのく事にて  
一家とるるゆゑ元文中 諸邦の蕉門の色とて  
古風の再興をはうらふく 伊勢の麦林と称して  
麦行と文ゆ又 幕居と改む 其門人は 都及諸州  
あり 今もなまなり 人言一 實也 元年 五月廿九日  
安永九年 子年 二十三年



○ 門人の中 俳諧と業とす者 身解 右在 門是  
 ○ 冬 歩ハ 先河の 以後 亦 判者とす 今ハ 在 風ナ  
 ○ 冬 津ハ 先河の 以後 亦 判者とす

松露庵鳥醉

左明 百明  
 鳥明 字石 紫居

白井氏上総の 彦也 元文の 初極 先河 三解庵と 建は 時  
 西奴と 改と 多岐と 号一 此庵と 字ハ 厚ハ 松露庵と 建  
 我門人ト 司在 明和 年中 卒 門人 左明ハ 先河 卒  
 其徒 今ハ 此 反 風ナ

松頼庵古岳

晩年止業  
 高少庵 秋山 東嶽下

古川氏 常州の 彦也 元文 五初 松先河の 門人  
 三解庵 亦 信一 号 解と 替々 随身 する 九年也  
 先河 以後 三解庵 之 末子 の 地ハ 移す 初 吐花 秋山  
 古岳ト 号 以 頼庵ト 市 中 多 誤々 古連 申 随々  
 安永 三年 午 十月 廿二 日 卒 曰 九子 年 あり 七 年

抱山字明是

平橋庵 散冰 在甲州

小宮氏 武州之 産也 本所 住

浮亀庵卷町

如市 卷尺 五 在甲州

与月氏 武州之 産也 牛込 住





只蘇護子圖

予仙

東瀛下連

青柳也二節之筋若未より

柳居士

日夜流あり小くまじ

秋瓜

公達ハゆり嬉しき持を

百花

所替り品替れ酒

百童

月ハまじやのり本の定る

波静

角のらふを秋の山

呉詠

初ゆふ尋り松有枝

花六

連を川僧と墳へ橋折

三紫

天

五



栗の飯かしく同春肘肉くら  
をもちくく片終 帚  
木障しの車の昔思ハハく  
娘さうりをか葉の漏矢  
川音も月の中ハの吹草  
買の扉の窓も清多  
うつうりとおもハ裕の裏を  
能の樂屋の境所  
入表夕日の影も花の影

柳 丈  
露 船  
山 只  
素 練  
巴 草  
波 勢  
号 詠  
百 花  
百 臺

二  
浅くくふる光を若館  
をふるくはく暖れ伊勢糸  
流くハあふまへて見  
燭臺の中を流ハゆき品定  
止む事 ぬるのうら  
押合く舞ふ所 於のちく  
又徳本の夜代く  
夜まひもつちうら 柳葉分別  
煤掃ハ音 餅糖の音

花 六  
之 樂  
山 只  
秋 瓜  
柳 丈  
露 船  
百 臺  
素 練  
之 樂

天



入子の聖い出子のぬき

百花

我も〜と救免見よ

秋瓜

月あふ日も暁つ峰一川

山只

留と〜もこれ密柑也

空船

移持〜も〜も川より秋の美

波奈

筆も遣つ寸繪のふりり

呉詠

松子置くさうのちのあまふ

柳丈

〜の千の〜の晴ぼり

素練

枝をきぢ其は其値花信書

花六

印中と高支香を陽を

巴草

香吟

禁う〜ぬ〜日のきすけ〜

波靜

馬ふ鶴駕ふ袴や山さ

百花

川體〜茶〜利〜り涼了れ

百壺

月花と佳ち〜見〜わ車のを

三樂

乃呂〜と鬱〜馴染〜

板夫

夕う〜わ花〜月〜の首井筒

呂祿

酒入ぬ寺ふいお〜花地う

山只



棉島の雪の清きり神しくも

露北

目よりよりい下りく落けくゆ干し

素練

あまの鏡ふくまの下戸や冬籠

花六

つぎや松ふ低衣君袖たす

巴草

百年の本ふまを布く事なれ

秋瓜

表 六章

南うし神を摘想すす茶葉が

板居士

短尺はけくち松を大木

琴堂

かまゆく田ふみれ日の影ふ

翎餅

一度ふ布くおちくらの種

千泉

おぼし男と先へまふまの落し船

花選

直衣の神の香をくまり

石芝

各吟

おろろもを愈る梅をよ希くち

琴堂

かき島よ毛焙所かきくや茶摘定

翎餅

早の名も貴おゆりり郭り

花選

病のちくく旭山ふりまみり竹

石芝

天



ちんくく桂のちけり空を了れ

千泉

春 八章

今桂の竹の客あり夕暮り美

柳居士

昔 夢をいふんこ身啼

楚諾

山水のさゆく 曾を折るまき

兔束

くわこ三 軒 家をも得ぬ

同喜

世の中ハ下戸ふくぬて世を

東胡

羽織ハ入と三層ふあきり

曾向

后の月花那の乃 客あまふる

竹路

あーこふ 雲 空ふ 玲ひー

加筆

各吟

春をさきい出さる春うさ

楚諾

春うらうらーの色を春を雨

竹路

此やうふ人もあつた春ふれ

東胡

春ふハ物アまふた 淫樂ハ

兔束

春春ハ昔ハ昔との中より

曾向

朝ぬも又怖ハ春うさ

同喜

春 六章



少くも品々替賤紗すりかきけり

柳居士

燈次の出入も風多しの時

柳孫

中葉内子も清り止む所一いさ

仙遊

早くぬ羽織ふ見違ふ大

那松

島市のそと程と月も中へ居

此川

寄のまももそあつた船を

楓筆

各吟

一夜中おと帝御す陸より

柳孫

香はよりい今と飛るり梅のそ

仙遊

又筆の字一そくりる松とくす

那松

むくも見る花ふいあゆむ牡丹う

此川

そ尾吟

松月庵連

絆の目やあきつゝ烟を君のそ

柳居士

神も禱ふぬむ裾川

花天

さうつあふ口の陽光を向を言

平甚

桂群 川 干に干音

吾水

桂木屋ハ七うも中くも卒驚也

思余

くら水 ぼろも晴く 幸い

雨亭



月の影、一所に置きて丸 硯

梧 法

芳乃、くまのこ、おぼろしく

公 鳥

空、清く、くまの、高の、火焚く

兔 雪

眠、乃、くまの、高の、火焚く

巴 柳

帰、くまの、くまの、高の、火焚く

反 哺

言、向、くまの、高の、火焚く

鯉 江

清、くまの、くまの、高の、火焚く

急 堂

松、くまの、くまの、高の、火焚く

貴 水

ま、くまの、くまの、高の、火焚く

芥 成

影、くまの、くまの、高の、火焚く

茂 重

花、くまの、くまの、高の、火焚く

柳 居

年、くまの、くまの、高の、火焚く

花 天

葉、くまの、くまの、高の、火焚く

燕 飛

さ、くまの、くまの、高の、火焚く

草

眼、くまの、くまの、高の、火焚く

芭 疇

手、くまの、くまの、高の、火焚く

繡 口

お、くまの、くまの、高の、火焚く

川 集

天

上



友を誘つてつらつらの節

葛次

壺の中の虫と菩提の撞木剛

土弘

十あぐの麻子と幢と動れ

波鯨

本層ふいふちと屋をすまんと

丹頂

軒の夢より本借とぬ

松志

哲人の影と雨と感念

有花

曙もよし夕もよし

里夕

杖の思えぬ茶の括日記

柀露

其のきりも思ふ事

楓翅

各吟

時中も毛庵の日向鉢の梅

燕飛

山吹のやうに片行や水乃音

兔雪

谷覗く松の玉うゑや藤の葉

波鯨

蝶々や花ゆき人を長ふり

土弘

うけあひのやうなまきり木の葉

有花

谷川を清ぬおあり散れ櫻

羨次

若草の音とて癒る那路なれ

反哺



五家ハ汗白芥菴の妻の秋  
梅白晴や星見のよりいづれも又  
唐と野ふ又陸是——と青田ハ  
空より風拂歩リあまきこれ  
川より細の目ふ山角く待  
おこふの物と尋ら置了か  
涼——との浮合をよ——おをさ如  
糸は——わいふ又まの情かうふ

平菴  
白鳥  
丹頂  
川角  
鯉口  
貴水  
後川  
芭曉

峰——旭より出たまみらうふ  
夕く——つらうの月見か  
おぬふ木魚の交ふあぬか  
静ふそく——岸の女市舟  
那のふれお橋やま——山と見ぬ  
望を——あふ生れ、南うれ  
口けふ書ふもかふ——空か佛  
小風の軒控を巡る下菜か

共水  
幸々  
兔峯  
里夕  
楓翹  
雨亭  
思泉  
梧社



瓢 早ふうまじま本や地多き

幾堂

礪山の裾地は直す千身下れ

巴板

之は目もと草類ふくむる心もあふ

板志

桔槔風の吹む東の谷うま

弁成

里、ゆく日ふんくは、落葉が

律口

牛 稼ふさつふはげれ日刃バ

之人

呑口

曙、山をくまると言内あられ

拙露

割れを圓くく置持あふふ

巨釣

欄干は月かしくも多も千をうま

和丘

翁うわわ一輪一夏とくももま

花天

表 八章

字く日喜の平ふ実引 希うれ

板居士

茶屋の床に毛糸そのの中

仙泉

書みへの書らよ入ふ筆も書あけ

惟一

雨 せめわうふあり出ーきり

那妻



川の口つゞく俄ふおつちりし

仙宮

豆磨きく 磨らいつてまゐるを所

末雨

白の川と山と障子よおの影

等非

小毎の雪の吹きまゐる夜

枕草

冬吟

雪蘭や枯葉を風よそ花ゆり

蓬草亭  
仙泉

ふ向ふもそのふきてこ村女節舞

仙露

稲つゆや照とやまひしをく

等非

是くこふまの おふる梅のこれ

神麦

後山の水あしと高ぬ田所うら

唯一

枝あしとすゝ笑みればけしけ

末雨

そ尾吟

氏孫父連

見しきもあそ出きり 枯木のひんごき

板居士

白しきもさそと暮あし 忍冬

枝舟

入八多後かき家のおん亭

周野

降りも降しと晴も妙

巴山

月ハ山いさむ本町の島の影

百花

冬張のふも神ふら

知樸



幕中下の戸をふらして居る

江色

詩平ふい鳴る音ふりの際

周野

天中の砂子とさえずる音は

枝末

おれさうやく奉る一宗

系系

花も今揺蕩の年と年々

台榭

かゝるも音くさるふ交束

何負

冬吟

嘆きもい月の小さき牡丹うれ

江魚

飛石とたし足あふやかり

百花

ふ水も大さうるの暮みうれ

巴山

葉の音や葉ハ木地の輪転機

知慥

そよ風の音と惜まき菌より

周野

杖よりおと思ひぬ花望み

枝子

表 六章

上毛高崎連

滑一羽さく見をうり夕をうれ

柳子土

まの音後く紫よを待

分江

草りよ入い何をうり草提

雨竹

くわねささる表うれ也

一草



涼しき月に鳥出ず竹格子

分江

又玉替りく懐ぬ衝立

雨竹

吟

障子も日土まハちり多飛

分江

おふも一送別の胡也や車の上

雨竹

青帯も淋襟くくう詠

南枝  
一草

表 六章

武州忍城下

元日や替の櫓有りけり

板屋土

寒 遠く 旅有り 詠

雁字

百鳥の聲山も亮也満ち

義市

くもるはより一りや

杉叙

必産ハ月うく 鏡くゆり客

葵扇

もりく 翠の 鼻香も来

吐雲

夕月も字活ちらも 原氏雪

板屋土

舟く 繋く 一葉の 船

茶立

木犀も園の法入る香も博く

香印

障子も字く 羽扇も、月

其香



四つ〜あゝ奈暫く雨の晴間より

秩生

馬ふ仁と〜地を横より

如岡

各吟

飛心より出るもか〜の陸より

秩生

草標や裾多かり〜女の童

雁字

井〜音ふ〜岸の傍を〜

舞市

蓮さ〜わ〜れ 蒼〜う〜よ〜と合々

葵冠

野うふお〜〜き〜う〜西風が

杉叙

善ふ〜あ〜地の方〜回〜二〜案山子か

其否

掃〜く〜冷〜し物ふ〜暮〜し〜暮〜の雨

有節

我亦多〜叫〜く〜毛〜々〜り〜汗〜多〜き

吐雲

那旅の方す〜〜〜も右后の月

如岡

仍秋やお日と〜〜く〜東山

策立

表 一章

忍城下左連

白の〜〜ハ〜帯〜禮の色や〜〜

初居

寒〜き〜ハ〜咽〜く〜見〜し〜交〜小〜かゝ

寛志

仍遠〜し〜平の嶽の〜高〜く〜至〜し〜

其川

一〜た〜ふ〜た〜つ〜と〜冬の〜ま〜き〜り

那否



竹葉のほろろ 詠を皆そしけ

共之

久しかりあしき連くハ歌見れ

左来

あしき月多和しく小やうの姿

画杉

那山の景の所ふきハまれ

小畑

各吟

鳥り安き山の姿わかまつて

艾川

松乃名を問ふまきり涼うれ

神身

涼さや星内いさか松の月

共之

算の燈の細くあり千をうれ

画杉

まゝ山ハ喜々表わてつきれら

小畑

是ちくく小美夜ほしく青回ハ

左来

予も詩もたふ止れ 杜那のち

寛志

そ尾吟

羽生 梧瓢 庵連

くつ解の贈子お置く其むより

柳居士

軒 隔はれ月をいふてあき涼

我后

之反の田ふも曲りれ秋かりき

徐杉

枝もあきさぬ風こちより

里嶋

腰のくく汗を飲う寸指のち

韓子



海をらうと山動くあり  
やまをゆくぬ群一ま家の市  
ふりてくふふふふふふふ  
一匹の虫ふふふふふふふ  
遠き花の空回る之所  
そ一筋ハ乃ハハハハハ

桑圃  
澤槎  
文江  
太依  
了考  
暮蟬  
楓年

各吟

色込、秋の日の雨、時雨了れ

言論

星の悲許とあつぬや  
あつぬやあつぬやあつぬや  
人音もこあまくの町  
あまのいふ縁の止む  
あつぬやあつぬやあつぬや  
あつぬやあつぬやあつぬや  
あつぬやあつぬやあつぬや  
あつぬやあつぬやあつぬや  
あつぬやあつぬやあつぬや  
あつぬやあつぬやあつぬや

徐松  
右派  
沢槎  
韓子  
了考  
文江  
桑圃  
了考  
我后

天

井



了尾吟

遠州一菊菴連

けつりし身者酒者や空の霞

柳居士

冬夜節のまじふ

木籬

寂然と静まる時ふ起る言

魯通

ら次中を酒のあまり

茶林

入船の竹丸菊丸日の秋

号吟

葉ふすじ虫のおらふ音と帯

竹浪

心奪けく風吹出しくく空を

沙明

又くり返す後おの上

暮之

垣を見のち高りくとぬ交り

一和

買とちいれ荏苒あまり

梅二

影まきよ花多旭のいや高を

観之

閑伽のぬるをぬく多浪

兔白

各吟

金谷

朽木ふもそのまがりや五月雨

雁里

折こつましく居見付らまらけ

那多

と重ハ子をぬくやうに小車櫛

茂涼

長閑さや酔と群れ不布川と

竹浪



憚るくわ仁王の程美くし  
百水

角あふわ日の虫く垣の裏表  
随波

累佛尔花之替く清水城  
白東

能見くハ張くぬ貴也鏡月  
毒仙

畑人毛蔭子欠や合次の花  
松甫

吾同子抱ハ物うく友の花  
草牛

葉の影多底よく春ハ苔清水  
吾耕

表 六章

遠州日坂連

角力ぬ手影見く岸の清水城  
柳居士

小中ら裏かえ表裏の原水  
蘭十

構ハもありと所を飛居る音  
孝夕

急を置くまくの渾天儀也  
左園

障ふくわくハの月のあまうら  
詠子

乃さくまきハ麻も詠とぬ  
来阜

各吟

似城尔末糸交れハくま  
葉十

岸ちの菊毛杖窓く日表の  
灯雪

上下の武者うらありふ  
詠子

相良 五十二号

新甫

おま



おきし明く戸糸稀人わ菊の茎  
こりくく旭の動く水了を  
翁うふわ葉いひまよる物かうら  
かまはくし櫻ぬ水糸染上り

表 八章

越後出雲峠連

一重けくうなせ遠一壘の草 柳居士

麻手伝ちる 松隈の里 扇下  
入海五月の虫吹いほきく 吾柳  
糸のちちくくむくく横入 泉古

おも干葉竹、荏力ちの五川 樞里  
山躰ちちくく又日和 軒 吹夕  
足弱の連糸ハ丁とよひおのこ 菱四  
まうくあゆみ清水見付る 休司

各吟

葉を破る角糸ハあつすつり 針村 吾希  
ふちやわ早夜 袂のふれより 増田 糸古  
本とあすくくくく明あかり 名栖 吹夕  
明日ハ白麻くくくく人つ櫻 木尻 柳下



とそこの疑しいち太枯神下れ

柑坪

作司

身龍の戸も明捨くまの月

小正

菱四

てつをわおあわいぬ降ひん

出雲守

扇下

表 六章

甲州山房連

宿く夢の夢見りよりいほくま

柳居士

あわい軒のあたる雨岳

梅童

川留尔東海さもおあま

寛山

肩軽くく干魚高い

梅明

つ破の月まきくおあま

麥賦

あまらうもふ掃あまらう

柳平

冬吟

おうふねの日よ〜嘆き交

梅童

あまらうの山を錦や后有月

寛山

あまらうの山を拾ふ秋のすま

麦賦

あまらうの山を舞のあまらう

柳平

神さ見馴ぬ人あまの雨

梅明

表 六章

おまらう

あまらうの山を屏風さまらう

柳居士



雪ふるも青まの木のそりし  
 上蘭のそりふるもくまのそりし  
 池子さうのまふふふふふ  
 雪ふるも山くくくくくく  
 山くくくくくくくくくく

梅賦  
 梅童  
 兔丸  
 如想  
 吟芝

各吟

山吹の雪ふるもくまのそりし  
 雪ふるも山くくくくくく  
 山くくくくくくくくくく  
 雪ふるも山くくくくくく  
 山くくくくくくくくくく

新巻  
 如想  
 兔丸  
 梅賦

雪ふるも山くくくくくく  
 山くくくくくくくくくく  
 雪ふるも山くくくくくく  
 山くくくくくくくくくく

吟芝

表 六章

おきく

雪ふるも山くくくくくく  
 山くくくくくくくくくく  
 雪ふるも山くくくくくく  
 山くくくくくくくくくく

梅居士

雪ふるも山くくくくくく  
 山くくくくくくくくくく  
 雪ふるも山くくくくくく  
 山くくくくくくくくくく

竹我

雪ふるも山くくくくくく  
 山くくくくくくくくくく  
 雪ふるも山くくくくくく  
 山くくくくくくくくくく

友秀

雪ふるも山くくくくくく  
 山くくくくくくくくくく  
 雪ふるも山くくくくくく  
 山くくくくくくくくくく

一碎

雪ふるも山くくくくくく  
 山くくくくくくくくくく  
 雪ふるも山くくくくくく  
 山くくくくくくくくくく

梅童

雪ふるも山くくくくくく  
 山くくくくくくくくくく  
 雪ふるも山くくくくくく  
 山くくくくくくくくくく

吊吹

各吟



煙きつふおもひ一語一々をのち  
一日二日三おちりくも櫻下れ  
まを雨ふ筆のまはるもあつち  
ちよのまわま止りるの地の外  
行まわ破も障子も己の備  
徒おひ車の短さをそんたく  
念さや流もやしもさか  
おまじりさつちさくく  
やわりの上戸ふちりり郭

万カ 笛吹  
一 碎  
休 我  
和計屋 調不  
川 吹  
予 園  
南昌  
儀童

際より流まふ拾ふ一葉お  
白ふぬくく尺もぬくよ一福水  
ま中一高ちわく一帯お初とみら  
学芥い子いあくまぬぬまが  
おまわいこれ拾まの粒アふ  
七夕の秋も一や一 仲上ア  
むあ一那わまううまう一渡りる

新巻 如 醉  
下出山 雨 隣  
伊珍文 竹 下  
文 翁  
二つち 玉 枝  
一古坊 魚 藻  
石 戸



表 八章

か州金澤連

る岳の翠柏多し好家陸可た

柳居士

散おーいなる梅の松先

穢則

後古亭の冨いさし〜く〜来て

桐雨

將其おぬおる〜り〜く也

里塘

吹瀧上とまの付き〜八月も有

予卜

おー吹〜もも〜ささ葉

孤量

枝折戸の外も菌の二つ之ッ

枚白

大朝も来た日やり書通

机羊

各吟

序のたけ見あ〜て暑了以

穢則

今澤〜あ〜たれ也禱〜も

桐雨

川狩や水もさふあ時涼〜

枚白

坐坐〜〜〜〜〜〜〜〜〜

尸塘

友物の枕も〜〜〜〜〜

予卜

炭竈や雪〜〜〜〜〜

路草

上八章

路州松山遊山金連

麻の身〜〜〜〜〜

柳居士



諸君むすしふたぢらすらむ白  
 書又への結まじぬらゝの入室  
 何のそまよ不白ゆいふ  
 ことらうぢうぢうわくぢかぢぢ  
 さうぢ見あうぢ危丁と研  
 山、日、結、し、師、ま、の、香、の、室  
 寂はらうぢ甲一嘆の極  
 各吟  
 翁うわつ浦了らふ事化格水  
 大丁  
 途涼  
 至長  
 及樹  
 泉舎  
 坊岸  
 昔如  
 及樹

秋風の響やう思きりか節弄  
 芽陰の雪も種もあゝ驚うか  
 橋ふる川人の思えまじくまじか  
 くつ存わらうし待素白  
 百生の音そけ思へぬ嵐うれ  
 翁うわつ心あとり弄ぢぢ  
 表 六章 東武達磨寺  
 ち、林、一、翠、と、蒼、一、言、を、中、ら、に  
 唐山の圓跡裏白く夢一多  
 至長  
 途涼  
 昔如  
 坊岸  
 泉舎  
 大可  
 柳居士  
 か、一



茶蘇うききりて行る水也

空原

羽織つるきりて行る水也

一元

似くきりて行る水也

柳尾

是より南の口行 鈴虫

芳市

冬 吟

紙條の引きたる水也

可一

櫛子も空の流る水也

中原

虫啼く日天も流る水也

一元

枝もく白くも流る水也

希尾

撞撞と耳へも流る水也

昔市

系々わ小きくも流る水也

金波

冬 吟

巾の袂へも流る水也

板屋士

再春かくも流る水也

阿山

さへりの川水も流る水也

蘭陵

たへりも流る水也

恭我

いへりも流る水也

秀普

雲も流る水也

剛牛

天

地



繻車く秋の芝居も虫つちらち

鳥更

くろくろく有り 襪のハ所

梅枝

遠くくお弁をぬくく虫入

牽車

祈りありし日 和室をいそ

餅糍

一ひの糸と女房の詩は書

草光

算ハ其儘の障のぬき

巴草

各吟

存久手つるハ並木の程あり

草凌

老翁の錦糸替ハ衣のれ

旁看

来ぬ人を待つくお弁ハお弁

草光

囉佛や一日切の浮世者

牽車

涼ハさわ山雲ハ水白

鳥更

老の才の机もろえれお弁

恭我

吾弁ハ日名子暗き因西

梅枝

清くくうの付筆や書のは

餅糍

余の草もまきハ音つお弁

明千

まきハ見もハ涼ハお弁

岩白

是ハ又京の田舎ハ草蒲者

餅山



表 六章

常州小高連

木女寺、世と色ありや涼子

柳居士

くろ易きも静よの友

滄浪

有合の調度よおの埒明く

古道

時の用おはるぬ静を

高卧

困しき中お遊よも里の月

柳圭

あゝぬ先うゝ痛かさま

以遊

各吟

新顔に候ふる車よき

高卧

堀の辻の裏も啼はし免

女遊

一帯もあつたの所わたりくす

柳圭

舟の耳、空のふらふら

古道

日よまよひ月まよひ思ふ回柱られ

滄浪

表 八章

武州蓮谷藤月庵連

杯尔、昏睡く里わ片の春美

柳居士

心代くり上まをる川

素秋

言身とそよよ行逢ふそよ

東翁

心くくくくまよひ

素重



次の詞を其次の詞も松乃影

下俣

さしその的の女より年々

草十

夕日の風はさかりきあまの

飯山

登あめ雲の泣く又雲

南枝

各吟

百生やむし花いふれ費多も

素秋

やうのまふまげのあまの菊の茶

素重

春つらりと霞やうへ輝の命

東翁

あまらわやの橋よを覗かぬ

下俣

田の中へ瓜の這はむ那分が

飯山

棒ふい味の松ややが峰

草十

あまの雲の櫻さ見きり氷室山

南枝

表一章

花い人の買ぬく置く巨燵か

板屋士

さすて軽き音を筆

留梧

搦手い九折するそより天

柳枝

日ふきさうくと根をふり

冬樹

釣穂のかりくあめく鮎り

虎頭

天

九二



遠あやふしむを百いたすさう  
きうつまもほくさう月も善返り  
あつりの虫の中と川子  
金波 素南 柳打

各吟

中の上川神もよりきるおとつらぬ  
念らねねわら隣も人の夢  
あふらうとさうやうく暗交の事か  
毎つらぬ千鳥の庭の事あか  
雪の巻くまも日ふかすもくま  
冬樹 留梧 序段 柳枝

あつとまもさうく降くゆ干が  
水石の井戸へくあまはく  
床啼わ首も林早のさうらの秋  
月影も水も連き川涼うぬ  
あふねや日降、向く咲もさす  
あつとさうやうさう月もさうのさ  
川の流の秋を影借り思ふうぬ  
あつとさく花はさうさう一菊合  
二度咲く人さうの告よのえり花  
柳打 素南 素南 留梧 序段 柳枝  
素南 留梧 序段 柳枝  
素南 留梧 序段 柳枝  
素南 留梧 序段 柳枝



蓬萊の木のこ残り日暮のれ  
持まひよ羽たぐく山の才おひ  
風よりそ日暮のけしきあやの櫻  
山小千や樓臺の鐘ハ珠簾のうら  
大豆をいふくく焚くり後の月  
おれく雪を結してけ音おれ  
家おく庵見え直す葦上ふたふ  
帰る。日の暮とさしよ湖水が  
おきし日のくつをさかたりく

京

蝶夢

越十日  
山之

真津  
柵路

金沢  
し柳

燭人

巨井

了行

停松

見風

そ尾吟

松のくわりの枝ハ仙露おけり  
ま向ふ東風を吹入る夜  
是はけふあまの琵琶を響らし  
松の日暮を嘆け合き  
雨おー下戸も夜をまの目  
雪の下の雪ハ候幕  
詠うも市電の神楽引續き  
夕所く音く女をまき

松居士

亀文

風象

瓢箪

如川

仙系

夕如

南畝



思ふ事見せしむる春の初

山兔

雨ふさりぬる花をさぐりて

符子

咲けり花の本す流の東表

吟花

ぬるむ小川の流も首代

曾文

各吟

啼咽す蛙の息おとさず

吟花

梅のくわくはるの暗す竹の園

曾文

菜のふれお清の遠き家はり

符子

山戸不半

深小や照き入ぬ春一園

山府  
如川

水底の影定しぬる小舟のふ

仙菜

起く先そのうきわきの朝

山兔

童のたまたまのわづらの序

瓢子

飛く糸のさうりわづら花

首和

おすの戸ふらぬ梅あり梅の世

符和

献まの皆たつおわき山の林

山兔

曲古庵

春竹や久残りて川を渡る

亀文



ろく尾吟

杉原菴連

廿五

世の中の横隔きぬ娘夢了る

極居士

極了長き流き一筋

雲後

旅この小松引ふ尔勝付く

楓人

夕ふい夜と酒と給表

糸雁

新室有東南尔月を請

冬川

家とゆきふ置福の事

平礎

風やうく名坂のをふ橋の花

如傑

恋うゝ刺一發心のり

子沖

弘刀あまはうく松面き木綿た

時彦

ちうらく星の秋れ曙

那佐

街乃一堀の内さく花散りく

芳菴

うらむ雨のたふふかき多ふ

深雪

各吟

蹴おふ花を濁し帰れ府

楓人

水のおも地くうらうらあやみり

芳菴

青あし子停、ち舞ふ春の雨

冬川

山吹や幽ふ水有る青はうら

朱府



五月の晴るき月の影は  
 松風の拂 暮さるるおのれ月  
 空をきく川を流るる赤土の所  
 影のまはるるまはるる涼了  
 卯の系わき川 留るる咲残  
 なふふ松原のわき木

平礎  
 如僕  
 卯鏡  
 子冲  
 時路  
 深々

花影 色よき水や

まはるる

古庵元牛

權佛やまの牡丹の落るる

雷後





